

春燈

1 月号

January 2011



主宰の句

安立公彦

語りつつ声高みゆく霧の径

月夜茸城址朽木に眠りをり

これよりは木曾路や天地冷やかに

秋声の珠なす藤村記念館

しぐるるや旅の珈琲刻かけて



成瀬櫻桃子の句

子があれば子をおもふなり青葉木菟

『風色』昭和四十四年

平成二年、秋田の俳句大会で櫻桃子先生と湯沢市小安温泉に同宿した。二人で四方山話の後、先生が「ダウン氏症」の美菜子さまのお話をし、突然落涙された。寂寥を伴って鳴く青葉木菟に子を思ったのであろうか。

先生の愛娘を詠った俳句は、風景と共に美菜子さまが居、美菜子さまの後ろに先生が居て慈愛に満ちた句を詠じた。それは神慮を恨み神助を翼こいねがつた生命讃歌であった。

園部蒨郷

安住 敦の句

草田男忌天国どろばうと言はれても

「春燈」平成十三年

「草田男の臨終洗礼が私の理想です」度々耳にしたお言葉だ。たとえ「天国泥棒」の誇りを受けようとも洗礼で原罪と全ての罪を洗い清められて死を迎えたい……これが先生の密かなお望みだったのだ。それが叶わなかったとしても、先生の純粹な願いは「望みの洗礼」として洗礼と同じ恵みを受けられていると私は信じたい。逝かれて六年。私たちは先生亡き日を重ねている。

青柳 雅子

燈下集

○ 三代川玲子

うそ寒や三行半の古文書展
搾られて朱き涙の石榴の実
秋惜しむ大声発し天灯鬼
秋灯下あすら六手の影ふやす
正座して言葉慎しむ冬座敷

○ 豊谷青峰

城跡の県民会館小鳥来る
トテ馬車の馬の蹀草紅葉
野菊咲く元結干場のなまこ壁
秋麗やハイカラ美人のブロマイド
柳散る花街走る人力車

○ 高埜良子

人形に囲まれ眠る今朝の秋
手術後の傾く肩や秋時雨
松手入ついでに頼む椅子修理
お点前の師匠は牧師みむらさき
武家屋敷に切腹部屋や石路の花

○ 井上正子

明知線「ごくらく切符」霧明かり
柿たわわ美濃の家並に及びけり
霧ごめの句碑まろやかに先師文字
恵那峡や水面明かりの神の留守
もてなしの松茸づくし師の供養



○ 吉川 隆

どんぐりや童のままの道祖神

花野人渡しの鐘に走りけり

搾乳の若き尼僧や一位の実

朝顔の一つ一つに雨重し

秋日和植木屋一ト日本の上に

○ 本田 保

秋深し雨降ればなほさらのこと

喜多院の紅葉にカメラマンと画家

辻褄を合せる言葉うそ寒し

命燃え尽し消えたる流れ星

ことさらに言ふ事の無きマスクかな

○ 瀬戸 峰子

軒ごとに一斎遺訓や菊香る

曲阜恋ふ楷の木すでに実を結び

埋門までは落葉の女坂

けもの道まつ逆さまに朴落葉

女城主の思ひ棲み古り時雨れけり

○ 棗 怜子

松手入れ馴染の庭師老いにけり

その人の名の出ず別るや金木屋

冬風やパステル調の二人展

やや寒や皿も温め八宝菜

そぞろ寒過疎地赴任の子を思ふ

○ 北岸 邸子

銀杏の皮を剥く間に日暮れけり

銀杏散る御堂筋行く車椅子

この下を走るメトロや銀杏散る(御堂筋)

銀杏散る一気走りの風小僧

踏み入りて落葉のこゑや冠木門

○ 今井 弘雄

資料館静かに混んで冬隣(岩村三句)

山霧や七百年の石の苔

すぐそこに冬が来てをりカステラ屋

木の実降る動物園のしじまかな

さざ波や水面の青き冬桜

当月集

安立 公彦選



○ 片山博介

蓑虫や先師「ちちよ」と泣かれしか

藩校のもみづる楷樹仰ぎけり

禅林や十五の石の秋の声

天高し雲鯨をそそのかす

器用とはいへぬ生きざま吾亦紅

○ 清水美子

月よりの使者来る気配十三夜

園遊会の名残の池やこぼれ萩

のつぺらぼうの痩せ蓑虫の縋る糸

初鴨を待つや鴨場の幾引堀

十三夜待つ人の居る家路かな

○ 矢口笑子

豊年や押されて痛き足のつぼ

あてもなく転がる木の実無縁坂

照紅葉つけ入る隙もなかりけり

ハロウインの魔女の呪文や大南瓜

真ん丸な猫の寝姿冬に入る

○ 小山繁子

秋草や母恋ふ風の四方めぐる

雀いろどき秋明菊の揺れやます

雁渡し波数ふゆる日本海

故郷や裾野明かりの紅葉山

晩秋や刻きざみ果つ砂時計

○ 川崎真樹子

世間とふ見えぬ鍾や露寒し

秋夕焼残る命を雲に分け

銀杏散る誰も無言の喫煙所

すれちがふ空似の人や火恋し

待ちし秋なれどけろりと過ぎにけり

春燈の句

安立 公彦選

耳鳴を忘れてゐるや虫時雨

東京 宮沢 治子

蓮の実とぶ避けて通れぬこと多し

天井画紅葉明かりに押しけり

神留守の境内占むる鶏の声

ソウルタワー雨月の街を灯しけり(ソウル二句) 東京 高村 和子

扁額のハングル文字や秋澄める

介護レポート夜寒の筆のはかどらず

不揃ひの梨も大事に挽ぎにけり

金柑の黄を目印の谷戸の家 神奈川 高橋 盛男

秋惜しむ俳人の墓つつましく

返り花昔こころに村役場

このところ不義理ばかりや西の市

草紅葉放牧の牛山下る 東京 小俣 剛哉

豊作の松茸横に見てとほる

信玄堤孟宗竹の下り籾

天心にスカイツリーの夜業の灯

膝で穂をかき分け立てる案山子かな

産土へ稲棒打ち込む餅かな

火の山の眠りを覚ますけむり茸

噴煙の佐久へたなびく紫蘇は実

白粉花や戸に佇つ母のかほしるし

雨降るとけふの著りの曼珠沙華

明日は海越えてゆく日やななかまど

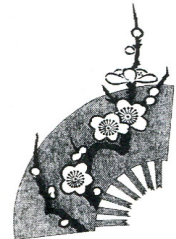
爽やかに留守する厨磨き上ぐ

よるべなき身のはればれと草の絮

日曜の憂うつ柿の実が照らふ

饅頭の湯気冬麗の中華街

赤レンガ街ぬけて港の冬の霧



長野 木内 博一

千葉 藤原 若菜

神奈川 宮崎 紗伎

余言

安立公彦

ているが、正しくは八一への悼句である。姿正しく押えた表現の中に、会津八一への思いが、つよく感じられる。

初焼くや雲をはなさぬ恵那の山

鷹崎由未子

岩村勉強会での作品。十月二十九日、勉強会二百目の朝は快晴だった。ホテルの窓のカーテンを開けると、眼下に恵那峡が蛇行し、岸辺の木々は紅葉を始めている。一面の櫛田の奥に恵那の山並が四囲を囲み、はるかに恵那山が山頂を雲にとざされて旅人を見守っている。

恵那山が『日本百名山』に収録されているのを思い出したのは、勉強会が終つてからだ。それによると、「恵那は胞に通じ、天照大神の生誕の際、その胞をこの山頂に納めたのが恵那山の由来である」と書いてある。

この句の「雲をはなさぬ」も、この由来の一面を担っているようだ。改めて神秘的な思いにうたれる。

たもとほる先師の句碑や深む秋

藤原 繁子

勉強会初日の日は折あしく雨だった。立冬には十日ほど間があったが、降る雨はまさしく時雨である。藩校の門の石段を下りた一面に櫻桃子先生の第二句碑があった。へ釈尊や藩校大木門ひらく。写真で見るよりはるかに立派な句碑である。

柳散る八一の歌碑の大和仮名

佐藤 信子

秋艸道人・会津八一は、明治十四年（一八八二）八月一日新潟に生れた。八一の名はこの生年に由来する。衆知の通り八一は歌の表記を平仮名書きで通した。へほほみみて うつごころ に あり たたす くだらばとけ に しく も のぞ なき。漢字を用いない分、ことばの間を一字空けるという型を生み出している。

会津八一のファンは多い。ファンと言つより信奉者と言つべきか。三十年ほど前『石榴抄』（結城信一著）という小説が出た。今、作者の句を見て改めてその小説を読み返した。八一の歌の玲瓏さに通う澄んだ小説である。

八一の忌日は十一月二十一日。この句は八一の歌碑を詠ん

この句、「たもとほる」の古語が、句碑の建立された辺りの雰囲気をよく表わしている。

みんなみんな逝つてしまへり秋の虹
尾野奈津子

今年（平成二十二年）も一門の多くの先輩句友を失なった。一月内藤鞠枝、二月中島和昭、三月後藤静江、五月小宮淳子、七月岩井泉樹、八月猪腰俊の皆さんだった。ある人は指導的立場から、またある人は句友の一人として、この伝統ある「春燈」を良く支えて下さった。

しかし作者にとつて悲しみはそれだけではない。これは欠札の挨拶状が来て初めて知ったことだが、四月にご主人を亡くされている。これ以上の悲しみがあるうか。この上五中七の淡々とした表現は、それ故一層の哀しみを読む人に与える。尚、これ迄に頂いた挨拶状では、ほかにも作者と同じ悲しみを抱いている人が何人か居られる。この場を借りて心からのお悔みを申し上げます。

行き違ふ心の丈や檸檬黄に
佐橋 敏子

「心の丈」は「思いのほど」の意。
日常の生活の中にはこういう心の揺れはよくある。心理と言えば難しくなるが、心のあやともいふべき齟齬は、生活している以上避けることは出来ない。

しかしそれを割り切れない思いとして断ち切れないのまま

た生活の常である。この句、そういう思いをみごとに表現している。「檸檬黄に」の座りもいい。

誰が影か我に付き添ふ花野径
平野加代子

この作者も八月に最愛のご主人を彼岸に送った。へ鳥瓜夫との暮し灯しけり」と詠んだ平穏な日々だったが、十一月号には、朝焼の彼方へ夫の逝きにけりへ秋暑し除籍の欄の字のかすみへ身に入むや喪失といふ風まとひ」とその心中は察するに余りある。

作者はまた翻訳家でもある。七月号の掲示板で紹介したが、原書房から出版した、マルコム・ゴドウィン著『図説聖杯伝説』は好評を得ていると聞く。その一書は、今花野をとともに行く亡きご主人も充分に評価されたことだろう。「影」はある人にとつては、ある時「生き身」ともなる。

秋刀魚食ふ曾て千人針巻きし腹
廖 運藩

この句を見て一瞬息をのみ思いがした。子供の頃、出征する夫や子を持つ小母さんが、千人針を持つてわが家にもよく訪れた。そういう母も、長男の出征のときは同じように布に赤糸で縫玉を作つて貰った。武運安泰の祈願だった。

こういう思いは時の流れに埋没させてはならない。最愛の夫やわが子を守ろうとする女性の意志、それは遡ると反戦に辿りつく。作者も千人針を腹に巻いて出征した事実があったのだ。「腹」に千鈞の重みが宿る。（以下略）